Arnold Toynbee, *Christianity among the Religions of the World*

Charles Scribner's Sons, New York, 1957 pp. 116

トインビーは一九五六年に我が国に見え同志社でも講演されたので改めて紹介するに及ばないと思う。先年 An Historian's Approach to Religion 1956 を著して、益々宗教に対する関心を深くしているこの歴史家は本書に於て基督教と他の世界的諸宗教との関係について示唆に富んだ考察を展開している。本書は元来一九五五年に The Hewett 講演として、アンドヴァー神学校マサチュセッツ州ケンブリッジの聖公会神学院及びユニオン神学校でなされた講演を基として日本で書かれたものである。彼が日本に滞在していたとき、或日パンを買うとして町に出て、日本語では「パン」と言う言葉はなく、ポルトガル語を用いている事に気がつき西洋人が世界的な象徴であるものと思っているこの食物もポルトガル人が来るまでは日本には全く存在せずむしろ米がそれに代る役割を果していたものであることを指摘しているのは興味深い。(三十七頁—三十八頁)

本書に於いてトインビーは「歴史の研究」でもなした様に宗教を三つの類型に分ける。即ち自然を礼拝するもの、人間を礼拝するもと神を礼拝するものに分ち、高度の世界宗教はその狭義の教理の相違にも拘らず第三の点で一致していることを説いている。従って本書に於ける強調点は基督教と他の世界宗教との相違点を明らかにし基督教の独自性を弁証せんとする試みではなく、既成の世界宗教間の相違点を前提として、むしろ、現代世界の性格を築いている人間中心的宗教と対決すべきことにある。今日の世界の性格は彼によるなら後期基督教的文明 (Post Christian Civilization) であって基督教の精神から発した文明がそれを喪失したものであり、むしろ集約的権力崇拝としてみられる人間礼拝としてその性格を捉えることが出来るというのがトインビーの一貫した見解である。この点に於いて彼はファシズム、共産主義と国家主義の三つを例として挙げて分析を進めている。(第二章)

ここでトインビーは基督教と西欧社会の相関関係について可成り鋭い分析をなし、基督教が西欧文明と結合したのは比較的最近のことであり、それも極く一部分に留るに過ぎなかったことを指摘している。(五九頁) 基督教は所謂西欧的基督教によって決して独占されたことはなかったことを、初代から現代を貫らぬき、又中国に伝道して景教からロシアの東方教会や小アジアに伝播したモノフィサイト (Monophysites) にわたり縦横にわたって実証した後「歴史に於ける基督教の果す役割に比べたら西欧文明の役割は極く小さなものとなるであろう」(六三頁) と断言している。

次いで彼は西洋の文明が他の文明と交渉をもった近世の歴史の後を辿り、初期に於いては宣教師によって交渉ははじめられたが次第に、商業的利益を追求する実業家や国家の利害を代表する軍人や技術のみを身につけた合理主義者によって担当され、その結果、非西欧社会は、「西欧社会の技術を最大限に接取し、その他

の西欧文明の要素は最少限に受取るに至った（五一頁）」ことを指摘している。このことは日本の近代化の過程にも当てはまることで興味深い。この点を一歩おしすすめて考えると日本における基督教理解が西欧的なものと混同されており、西欧的アクセサリーを除去しない限りわが国に於いて正しく福音が理解されることは困難であるということが言えると思う。

トインビーの所論の底にある一つのイメイジは西欧社会の成立する以前にギリシヤ、ローマの異邦社会に於いて果した基督教の役割りである。ファシズム、国家主義、共産主義の中にローマ帝国と共通した「集約的人間の権力の形体にあらわれた人間の礼拝」(Man-worship in the form of a worship of collective human power, pp. 15, 55, 80, 81) を見出し、その権力に屈せず異邦社会に滲透し、ローマの滅亡後もその生命を伝えている基督教の意義を現代歴史的世界から再評価しようとするところに彼の本意がある様に思う。

最後の章に於て、かかる集約的人間の権力が礼拝の対象となっている現代世界に於ける基督教の他の諸宗教に対する態度についてトインビーは次の三点を挙げている。

第一に基督教は先ずそれにまとわりつく「西欧的アクセサリーを追放すること。」(to purge our Christianity of its Western accessaries, p. 92) を説いている。この点に於てトイムビーは第二、三世紀に於けるクレメンス、オリゲネス等アレキサンドリヤ教父達がギリシヤ・ローマの世界に基督教を滲透さすべく、その文化の中に培われた人々が親しめる様に特別の努力を払った事や十六・十七世紀に中国・印度に於てカトリックのジェシウット(The Jesuits) が同様の考慮を払って伝道したことを高く価値している。西欧の多くの教会の礼拝堂に於いて、基督教の旗と国旗とが両立して飾られている状態を批判し、そこに伝統的基督教と新らしい異教主義が一つとなっている姿を鋭く指摘している。（八一頁）我が国でもかかる研究が、教団の宣教研究所等を中心として積極的に検討され慎重な考慮の中にも新らしい試みがなされることが必要であると思う。かかる点で故魚木忠一教授の「日本基督教の精神的伝統」は貴重な資料であり又最近基督教新報に連載された、大山寛牧師の「宣教の対象としての日本人の特殊性」（基督教新報三〇七三号―七五号）は注目すべき論文である

第二に基督教が他の世界的高等宗教に対して取るべき態度は、基督教のみが独自性を持つという伝統的排他主義を除去することであるとトインビーは説いている。（九六頁）この点の議論は後述する様にトインビーの基督教理解の問題点となっている。即ち従来の基督教の熱狂的排他主義を攻撃するあまり、基督教自体の独自性すら見失って了うのではないかという疑問が残存するのである。彼が、好んで基督教とヒンズー教を結んだガンジーやシカゴの郊外に美くしく聳えるバハイ(Bahai) 寺院等を将来の宗教の在り方として示唆するとき（一〇二頁、一〇四頁）特に其の感を禁じ得ない。

第三に彼が主張しているのは基督教は絶えずその真理と理想を

非基督者に語ることであるとトイムビーは言う。(一〇五頁)この場合語るというのは単に口で説教するのみでなく、行動に於け実際の例を示すことを意味している。「一人の殉教者の死は幾巻かの殉教者の信仰についての整然たる神学的弁明にまさって雄弁なものであろう」(一〇五頁)と彼が言っているのは真に同感である。

本年六十八才を迎えます円熟さを強くしているトインビーの広い歴史的視野から指摘される現代の基督教の意義と反省すべき点は少くない。

この点我々はこの熟達せる歴史家の優れた洞察に敬意を表すものである。然し乍ら本書の論旨には少くとも次の二つの点に於て筆者は問題を覚えるものである。即ち第一に、トインビーはその出発点に於いて基督教と他の世界宗教との共通点をあまりにもナイーブに或いは楽観実に価大評下すぎてはいないであろうか。その結果先述の如く基督教の独自性の把握に於いて至って不徹底に終っている感を禁じ得ない。ここに同じ他宗教を扱ったクレーマー(Hendrik Kraemer, Religion and the Christian Faith, 1956)の書物とは全く対照的な極端を示している。福音の独自性を保ちつつ尚真理に対して開かれた寛容性をもって行く信仰者の姿が更らに究明される必要を痛感するものである。

第二の問題は彼の言う所謂近代的な集団的人間の権力礼拝を彼が極端に排斥するあまり、世界的高等宗教間の偏狭な排他者主義は減少する代り、世界的高等宗教が協力して、集団的人間の権力主義に対抗するという新らしい熱狂的排他者主義が生じる危険性が存在している。

彼の一段高く評価しようと努める世界的高等宗教の中にも、信仰の自由を認めない南アメリカの或る国々の状態や、政治と宗教の結合によって人民の生活が暗い芸に蔽われているイスラムの諸国の状況を直視するなら、トインビーが劃然と両者を分けて対立させるのにいささか躊躇を覚えるものである。

とまれ本書の持つ啓蒙的意義は大きい。特に初代の異邦世界の基督教の宣教の歴史に我々の眼を向けてくれると共に西欧的基督教のアクセサリーにみちた日本に於ける宣教の課題に我々の関心を深めてくれる点に於てその価値を認めたいと思う。(竹中)